

|         |                     |
|---------|---------------------|
| 氏名      | 加戸 瞭介               |
| 学位の種類   | 博士（学術）              |
| 学位記番号   | 博甲第 9128 号          |
| 学位授与年月  | 平成 31年 3月 25日       |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当        |
| 審査研究科   | 人間総合科学研究科           |
| 学位論文題目  | 他者の感情認知に関する認知心理学的研究 |

|    |               |         |       |
|----|---------------|---------|-------|
| 主査 | 筑波大学准教授       | 博士（心理学） | 山田 一夫 |
| 副査 | 筑波大学教授（連携大学院） | 博士（工学）  | 岩木 直  |
| 副査 | 筑波大学助教        | 博士（医学）  | 山田 洋  |
| 副査 | 関西学院大学教授      | 博士（文学）  | 片山 順一 |

## 論文の内容の要旨

加戸瞭介氏の博士學位論文は、処理資源の操作が他者の感情認知に与える影響について、認知・生理心理学的手法を用いて検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

まず序論で、著者は、認知心理学的手法を用いた感情研究を概観し、先行研究では感情刺激に対する余剰の処理資源が十分に確保された実験条件であり、処理資源に余裕のない場合にも他者の感情認知がなされるのかどうかについては未解明であると指摘している。特に不快刺激のような注意を補足しやすい刺激に対しては、処理資源量の多寡にかかわらず注意を向けるという先行研究の知見を踏まえ、本論文の目的は、処理資源の量に差がある課題を遂行させることで、感情刺激に対して投入できる余剰の処理資源が他者の感情認知に及ぼす影響について検討することであると述べている。

著者が用いた研究方法は次の通りである。まず感情刺激には、International Affective Pictures System (IAPS) という感情研究で広く用いられている画像セットおよび人物の顔を写した Karolinska Directed Emotional Faces を用いている。このうち IAPS は、感情カテゴリを3つ(快・中性・不快)に分け、さらに刺激中の人物の有無によりさらに6種類に分類して用いている。また、著者は、感情刺激を呈示すると同時に遂行する課題は、課題ごとに処理資源が異なるように、刺激と関連する課題(課題関連刺激)と関連しない課題(課題非関連刺激)を用意している。著者によると、課題関連刺激は非関連刺激に比べて、感情刺激に多くの注意を投入することができるため、行動反応や生理反応に与える効果が大きいと考えられ、これは課題遂行と同時に感情刺激に投入できる処理資源の量が、課題非関連刺激に比べて課題関連刺激で多いことを示しているという。そして著者は、実験が進むにつれて感情刺激に投入できる処理資源量が減少するように実験を構成し、まず実験1では、投入できる余剰の処理資源が相対的に多い刺激(課題関連刺激)を、実験2では、投入できる余剰の処理資源が相対的に中程度の刺激(課題非関連の natural 刺激)を、そして最後

に実験 3 では投入できる余剰処理資源が相対的に少ない刺激（課題非関連の synthetic 刺激）を用いている。なお筆者は、他者の感情認知の指標として、行動反応としては正答反応時間を、生理反応としては事象関連電位のうち後期陽性電位 (LPP) を用いており、さらに事象関連電位の anterior N2 を他者への敏感性の指標としている。

以上の一連の実験の結果として、まず実験 1 では、処理資源が相対的に多い状況下で、無意識的な他者の感情認知が強力であり、意識的な他者の感情認知と異なることが示された。また女性では不快カテゴリにおいて、意識的な他者の感情認知とは無関係に無意識的な他者の感情認知がなされることが明らかにされた(実験 1-1)。さらに、文脈の一致性が操作された感情刺激呈示時の無意識的な他者の感情認知を観察したところ、一致性にかかわらず不快表情のヒトに対する感情認知が喚起されることが示された(実験 1-2)。

次に実験 2 において、著者は、処理資源が相対的に中程度の条件下では、他者への敏感性が時間的・空間的な注意の制約を受けにくいことを示した。また、刺激に対する時間的・空間的な注意の多寡にかかわらず anterior N2 の増大がみられ(実験 2-1・2-2)、タイムプレッシャーが与えられている場合には他者への敏感性に関わる処理がより短い時間でなされる可能性も示された(実験 2-2)。

最後に実験 3 では、処理資源が相対的に少ない条件下で、他者の感情認知が注意の捕捉の速さ(実験 3-1)と捕捉からの解放の速さ(実験 3-2)に与える影響について行動反応を用いて検討された。その結果、余剰な処理資源が相対的に極めて少ない場合には、不快カテゴリに対する他者の感情認知のみがなされ(実験 3-1-2)、処理資源に相対的に少ない場合には、快カテゴリに対する他者の感情認知もなされていた(実験 3-1-1)。また、不快カテゴリではヒトなし刺激に比べてヒトあり刺激への注意の解放が迅速であることが示された(実験 3-2-2)。

以上の結果を踏まえて、最後の総合考察において著者は、まず無意識的な他者の感情認知が強力であり、意識的な他者の感情認知とは異質なものであると述べている。そしてこのような無意識的な他者の感情認知の強さをみるに、無意識的な他者の感情認知はある程度自動的かつ系統的な反応であると考え、利用可能な処理資源が少ない場合においても、特に不快感情の人に対する感情認知は迅速に行われると結論づけた。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本論文は、処理資源の操作が他者の感情認知に及ぼす影響について、事象関連電位の 1 つである後期陽性電位を無意識的な他者の感情認知の指標として検討した初めての研究である。処理資源が多い状況では、無意識的な他者の感情認知が強力であり、意識的な反応とは異なることが示され、特に女性においては不快刺激が呈示された場合には意識的な反応とは無関係に、無意識的な他者の感情認知が行われるという興味深い結果を示した。また余剰な処理資源が極めて少ない場合には、不快刺激が呈示された場合にのみ他者の感情認知が起こることも明らかにした。これらの知見は、他者の感情認知の生起メカニズムに関する新たな視点を提供するものあり、この点において本論文は高く評価できる。

平成 31 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(学術)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。